54

彦根藩 解剖図『解體記并圖』について

佐藤　利英，樋口　輝雄
日本歯科大学新潟生命歯学部 医の博物館

わが国には18世紀中ごろより近代ヨーロッパの解剖書や外科書が舶載され，新知識を渇望する医家たちの目に触れるようになった．宝暦4年（1754），京都の山脇東洋らが刑死体の解剖を実見し，5年後の1759年に『蔵志』を著して刊行した．東洋は解剖体に「夢覚」の名を捧げ，山脇家の菩提所・誓願寺に葬ったが，『蔵志』附録の「夢覚を祭るの文」の中で，「……心隔を切開して肺肝を洞視し，不言の教を受くる……子奚ぞ僇辱を悲しまんや」と弔辞を草した．爾後各地で解剖が行われて，記録されたことは諸家の記すところである．また安永3年（1774）に杉田玄白らの『解体新書』が公刊されたことにより，それまでの日本の医学で伝えられてきた所謂五臓六腑説，九臓などの概念に対して，改めて人体の構造を実見し考究する契機となった．

日本歯科大学「医の博物館」では，18世紀末に彦根藩で行われた腑分け・観臓の記録である『解體記并圖』を数年前から所蔵しているので，その概要を報告する．同書は美濃判二ツ折（21×28センチ）で，紙縒りによる袋綴じの手稿本である．紙数9枚，うち1丁と9丁は表紙と裏表紙で，表紙の外題は「解體記并圖」．2丁目は序跋で1行16字，1頁12行，全33行，「解體記跋　弟文明謹書」と記し，3～5丁の「解體記」は「岡崎邦仲達著述」とあり，やはり1行16字，全63行，序跋も含め本文は全て白文で記述している．6丁目からは全身図5図のほか，心臓や膀胱，食道・胃・腸の図が描かれている．序跋によれば，解體記の本文は長兄の岡崎邦（仲達），図譜は二兄の文徳が描いたという．岡崎家は彦根藩医で，仲達は江戸後期の文人画家田能村竹田と交友があったと伝わるが詳細は明らかではない．

仲達の「解體記」は「寛政八年夏六月廿四日我が藩に死刑の者あり，邦（仲達）と友人某等，屍を官に請い平田山に於いて屠者をして解せしむ」から始まる．寛政8年6月24日は西暦では1796年7月28日にあたり，『解体新書』刊行22年後である．彦根城の南約2キロに位置する平田山は雨壺山とも呼ばれる．滋賀県彦根市の市街地にあり，かつては火葬場があったというが，現在は千鳥が丘公園になった．続いて「初め屍を藁席に仰臥させ，上より徐々に刀を下す，天突より鳩尾に至る」と記し，大小腸を断割した時に「滓濊充満臭気酸鼻に堪えず」と，盛夏に行われた腑分けを臨場感あふれる文言で記述する．

山脇東洋の『蔵志』にはじまり河口信任の『解死編』など，解剖の実見記録が刊行されたが，『解体新書』に触発されて，各地では藩の允許を得て，腑分け・観臓が行われた．村上玄水ら中津藩医による「解臓記・解剖図」，上総飯野藩医の宮崎彧による「三之助解剖図」などが書写本，巻子本として伝存する．本館では，「杣田玄伯先生實地解剖寫生圖入」と箱に記した紙高26.7×長サ1348センチの巻子本を所蔵している．箱書とは異なり小石元俊らによる「平次郎臓図」（1783年）の模本だが，これらはいずれも刑死体による腑分けである．すなわち斬首され頭頸部が無い身体が仰臥，もしくは横臥した状態で，腑分けの方法に従い，皮膚・筋肉・臓器・骨などが順序良く写生されていた．

『解體記并圖』は，刑死体であるにも関わらず，斬首されていない全身図が立位で描かれていることが特徴だといえよう．肢体の位置が西欧の解剖書を参考にしたと思われる芸術的な配置であること，特に手は，あたかも印相を結んでいるように描かれている．全身図は，「背面脾臓位」「心肝脾腎之図」「去除諸臓覩胃全景」「開皮覩諸臓之図」「開胸肋肺心位」の5図で，「背面脾臓位」では，脊柱を除去した左側肩甲下部と腰部を描出している．

描写法や彩色は同時代の解剖図よりも精緻さに欠けており，図や説明が簡略なことからも，まず下絵として製作したものかもしれない．しかし頭部のある状態での腑分けを描写していることからも，本書は極めて稀な解剖図といえる．